

ロー兄弟 (Isaac and Nicholas Low) とアメリカの独立

茨木慶三

はじめに

既に筆者は、事件を一方のグループと他方のグループとの対立という過度に単純化した物語にしてしまう危険——そのための一途としても、伝記的アプローチの積み重ねが必要であることを指摘してきた。^①ここに本稿が、エルンスト (Robert Ernst) 史学名誉教授の論究に基づきながら、ロー兄弟 (Isaac and Nicholas Low) をとりあげるゆえんがある。

ところで、これまで歴史家は、いわゆる建国の父祖とはいえないロー兄弟を十分に注目してこなかった。しかし、彼らの体験はニューヨーク史上重要であり、より適切な検討に価する。

兄弟は、ニューヨーク・ニュージャージーの富裕な地主・商人の父 (Cornelius) と著名なフイスラー (Jacob Leisler) の娘の子であった母 (Jahanna Gouverner) との間に、ラリタン (ニュージャージー) にある両親の家で、それぞれ、一七三五年四月と三九年三月に誕生した。

一、

兄アイザック青年は、ニューヨーク市に転居、在ラリタンの父の仲間として織物商を営んだが、オルバニー市長 (Cornelius Cuyler) の

ロー兄弟 (Isaac and Nicholas Low) とアメリカの独立

娘 (Margarita) と結婚した (一七六〇)。また一七五〇年代彼は、輸入商ロット (Abraham Lot) の仲間となっていたが、ロットの植民地会計官就任 (一七六七) 後も輸入業をつづけ、各種織物や海狸・鹿皮を販売した^④。一方彼は、北部辺境地にかなりの利権を取得した。しかし当時の彼の主関心は、遠隔地への投機ではなく市での商業にあった^⑤。

市政上で彼は、愛国心豊かな活動家で、英国国教会支持者、市商業界の指導者、政治上積極的な行動主義者であった。彼は、印紙条例紛争のとき対英交易ボイコットを唱導し、タウンセント条例を自由と交易への脅迫と考えて英輸入品ボイコットを支持、一七六九年には非輸入協定更新のための特別検閲委員会の先頭に立った。また商業会議所は、彼の先導に大いに負うところがあり、彼は、六八年の創始者の一人、七二―七三年は会計係、七三―七四年は副会頭、七五―八三年は会頭であった^⑥。

歴史家たちは、アイザックの重みは、一七六〇・初期七〇年代の市政を支配した富裕商人の支持に由来することを当然のこととしてきた。確かにこのような支持がなければ、彼は、市政上の卓越を達成できなかったであろう。しかし、他の顔のきく人々も同じ役割を演じたのであった。彼が一貫して諸委員会委員長に選ばれた事実は、十分に彼の上品で穏健な個性を認められたことを示している。ところが、政治上敵対的見解を強力に主張し、「自由の息子」の創設者の一人であったスコット (John Morin Scott) との人身攻撃合戦に当っては (一七七〇)、彼は、謙虚な調子も通常の冷静な態度も放棄した。彼のド・ランシイ派支持者としての比較的保守的な傾向と、スコットの過激な行動主義およびリビングストン派の協力とが、対照して目立ったのである。七〇年五月の会合で彼が、既存の口頭投票制度を支持して無記名投票に反対したのに対してスコットは、アイザックは「なだめられない怒り」を招いたと声明した^⑦。もっとも、彼の方策はメカニックスや貧困者を擁護した急進派指導者のそれと異なっていたけれども、彼といわゆるポピュラーリーダーの間には個人的な憎しみは存在しなかった。ところで、本国の植民地交易への課税政策に対する反対指導者として彼は、「最上級のお偉方の弁護士会長」とあだ名されたにもかかわらず、穏健であった^⑧。タウンセント条例の取り消し後 (七〇年四月) 有力商人の協力をえて交易再開を唱導、急進派の反対があったものの、再度の世論調査 (ともに再開支持が多数) のち彼は、ボイコット終結を宣言するビラを公布した^⑨。次いで茶条例に対して彼は、スミス (William Smith, Jr.) 参議会員への総督に茶の陸揚げに反対する勧告を求める急進派を含む陳情団を先導 (七三年一月)、総督の茶の倉庫保管案に反対した。しかしその後、ワット (John Wats) など他の参議会員と問題を検討、陸揚げされても茶は無事であることを納得さ

せられて直ちに考えを変えた。一方急進派は、茶が船上にあるかぎりその安全を保障するとの自己の申し出を撤回、他方暴徒の波止場での騒ぎを恐れたスミスは、総督に陳情団との対談の模様を報告、茶を倉庫保管するよう促した。^⑩

商人は、急進派が牛耳った七三年一月一七日の大衆集会（通信委員会の設置と茶の陸揚げ阻止を決定）に驚がくした。アイザックたちは、署名者に茶の陸揚げ反対を誓約する契約書を配布したが、急進派との協同行動を拒否した。しかし彼らの計画は、ボストン茶隊事件の報が到着（一月二二日）したとき中断された。^⑪ 暴動を恐れた保守派は、茶の陸揚げ・保管支持をやめた。とはいえ七四年四月二二日、ニューヨークでも茶隊事件が発生した。この間アイザックは、「災害を阻止するために全力を尽した」。^⑫

同年五月一二日、ボストン港閉鎖条例制定の報が伝わったがアイザックは、他のド・ランシイ派一味同様、この条例のニューヨークへの適用を恐れ、同月一六日の交易者集会（ボストン支援のための通信委員会の設置を決定）を司会し、「権利と自由の保護」という共通の目的を考えた。「冷静な判断」と党派の憎しみの終結を勧告した。また彼は、三日後の通信委員会委員指名批准集会を指揮し、のち大衆に訴えて再び協和を弁護した。結局、少数で委員会を構成すべしとする急進派の主張は採択されず、ド・ランシイ派が多数を占める五人委員会が発足した（アイザックが委員長^⑬）。急進派は、アイザックの裁定を横暴と見なし、後者は前者の抗議をぶちこわしと考えた。五月二三日アイザックらは、非輸入協定参加を求めたボストンの懇請への解答起草委員に指名された。挑発的方策を阻止せんとしたアイザックら保守派は、事を慎重に運び、委員会を植民地際合是認の方向へと導いた。^⑭

やがてアイザックは、第一回大陸会議への代表に指名されたが、フィラデルフィアへの途次彼と出会ったアダムズ（John Adams）は、彼は「自由のための運動に対する愛着を公言するであろう」といわれている^⑮が、彼の心底は疑わしいと観察した。ともあれ大陸会議でアイザックは、アメリカの人々は西インド貿易の完全停止を受け入れられようか？ ラム、砂糖、糖蜜がなければ彼らは生活できようか？として、大英帝国への輸出禁止を始め過激派の提案にすべて反対した。しかし彼は、ニューヨークレベルで保守派がその執行を左右できるとの希望をもって、通商断絶同盟に署名した。^⑯

七四年一月、右の同盟を実行・監察するために設立された六〇人委員会は、その構成上より急進的であったが、アイザックは、その穏健で懐柔的な姿勢のために再び委員長に選出された。委員会で彼は、討議に影響を与え、他の商人と協力して脅迫や暴力行為を妨害した。^⑰

しかし保守派の努力にもかかわらず、七五年三月六日の大衆集會は、領地協議會の開催とそれへの代表指名を六〇人委員會に一任することを決議、同日同委員會は、彼を含む一一名を指名、その後住民はこれに賛成し、協議會は第二回大陸會議への代表を選出した。彼は、従来の穩健さを放棄、協議會反対と同會欠席を表明したうえ、「憎悪と党争に左右されすぎた」政治活動の欠陥を指摘した^⑩。さらに彼は、六〇人委員會が発起した四月二四日の野外集會が、民兵隊結成と市防衛準備の勧告を採決したのに対して、「自分は如何なる新戦力も欲せず、そのような如何なる戦力に基づいて行動することはない」として反対した。にもかかわらずトリーイは、彼を革命の首謀者と見なした。例えばロイヤリストジョーンズ (Thomas Jones) は、彼は「王をけなし、内閣をのろい、英議會をののしった」とし、また、「無限の野心をもち、十分な知識があるのに著しく頑固で、自説に固執し、党派の長になりたがる」その性格をけん悪した^⑪。

七五年五月一日彼は、六〇人委員會に代わり、実質的に市政府となった一〇〇人委員會委員長に選出された。なお和解の可能性を追求した彼は、五月二二日第一回領地會議議員に選出されると、同會議でニューヨークの政治的安定への関心を表明、同地の自治を保持せよとの動議を提出した。すなわち、「本會議は、同地の内政に関する全問題を自由に討議・決定する資格があり、またそうすべきである」というのであった。しかし、スコットらの反対のため、そのような決議案は握りつぶされた。とはいえ直後に領地會議は、単に大陸會議の勧告に「最大の注意を払う」とのみ声明した手紙「アイザックの動機と矛盾しない莫然とした妥協を公認した。また彼は、六月にワシントン (George Washington) 將軍の歓迎会を手配する一方、一〇月には、総督にその身と財産の安全を保障、総督の和解努力への信頼を表明した。恐らく彼は、領地會議はニューヨークを革命に突入させまいと考えた。急進派の支配と内戦への漂流を遅らすことを希望したのである」^⑫。

だが結局彼は、一月に一〇〇人委員會の委員長職を放棄することによって、革命への運動を和らげる努力をやめた。彼の公生活からの引退は、彼個人にとっては極めて重要であった。独立を支持することを欲しなかつた彼は、ニューヨーク市北方の田舎の家屋に引込んで、独立戦争は、彼の輸出入業と彼に富をもたらし、また大土地を手せしめた商業的コネを脅かした。恐らく、親密な家族関係が彼に影響した(愛する二人の姉妹は、トリーイの妻)。彼は、既にトリーイと見なされたが、七六年六月シュルーズベリーへ、それからの父の居住地ラリタンへ引退した^⑬。

大陸會議へ独立宣言後彼は、英艦隊への糧食提供の疑いで武装した一団に逮捕されたが、彼の大陸會議との大量ヨーロッパ商品供給の契

約を知ったワシントンの要請で放免され、家族とともにニューアークへ行って九月一五日の英軍のニューヨーク市占領を待機、一二月三日同市へ帰着した。やがて英将カーレトン (Guy Carleton) は、彼を守備隊内債務調停弁務官、のちにラム検査官に指名した。彼の英軍への協力は明白であり、そのため邦議会による私権剝奪 (一七七九) を結果し、彼が二三、四八四ポンドと評価した土地・家屋を含む邦内の財産が没収された。^②

英軍の同市撤退 (八三年一月二五日) のち彼と妻は、イギリスへ船出し、ポーツマス付近に到着 (八四年一月九日)、やがてロンドンに来て就学中の子息と合流した。その後の彼は、如何に憂うつなものであったにせよ、損失補償獲得に夢中であった。ロンドンに群がったロイヤリスト仲間との相互訪問が慰めであったが、帰米できないことに配慮して在米の弟ニコラスへ形見を送るとともに、弟に財政上の援助を懇請した。八四年春の彼の報告によれば、彼の補償請求が精査されるまで年額一四〇ポンドの手当をえることとなっていた。^③

在英中のアイザックの気分は、行きつ戻りつした。しばしば安逸と不安のために悩んだが、「運命に甘んじ」、補償請求委員会が損失への適当な償いと考える僅かでもの手当を配当することを希望した。彼は、在米の弟に委員会が必要とする没収地売却全文書を送るよう懇請したが、ロンドンで申請された評価と比較するためにロイヤリストの請求についてのデータを収集する目的で、アンステイ (John Anstey) を委員会がアメリカに派遣 (八六年早々) するとの知らせで不安を倍化した。彼は、敵が味方の証言に勝る不利な証拠をでっち上げはしないかと懸念したのである。八六年夏、第一回補償金を受け取った彼は、それが一、七〇〇ポンドにすぎなかったことにショックを受け、委員会の誤審と考えられる点に憤慨し、「黙って服従しない」ことを決心した。だが結局、委員会がその決定を覆えさなないことを知り、精密な調査が終わるまで問題を未解決にしておくとし出た。また彼は、弟が彼のために効果のある行動をとらなかつたとして、それに失望した。そのうえ、弟経由ないし直接文通による債権取り立ての努力も絶えず挫折し、最後に彼は、回収不能を結論せざるをえなかつた。しかしにもかかわらず彼は、イギリス居住を喜んだ。彼は、同地こそ「真の自由の地」と信じていたのである。それはともかく補償委員たちは、彼が求めた賠償を拒否し、九〇年までには、もはや彼の嘆願に答えなくなつた。そこで彼は、問題を下院に持ち出そうと決心した。弟は、過去の不平申し立てを忘れ、現在および将来の見込みに専念するよう忠告したが、彼は、その勧告に従うと答えつつなお再び、没収された土地に対する請求額の詳細な計算書を要請した。しかし弟は、そのような通報をすることはなかつた。^④

八九年末彼は、新しい心配事に煩わされた。すなわち、一人息子 (Isaac) が熱病にかかり、死ぬのではないかと恐れられた。しかし幸いにも、六ヶ月して息子は完治した。彼夫妻は、九〇年夏から秋に南アイルランドを旅行し、親戚や友人に歓待されたが、その後一年以内に彼の体力は弱まり、九一年六月には急速な衰弱を自認せざるをえなくなり、遂に同年八月二五日死亡した (五六才)。^⑧

結局彼は、土地・家屋・債権の損失一九、二二八ポンドの補償を請求したのに対して、五、一九五ポンドを与えられたにすぎなかった。また彼は、弟による財産権の一部の取得・再販 (五、七五〇ポンド) といった処理と出費控除後の彼への送金にもかかわらず、死の二ヶ月前に弟を非難した。こうして彼は、失意のうちに生涯を終えたのであった。^⑨

二、

弟ニコラスは、ニュージャージー大学に通学 (一七五七年クラス)、学位取得の代わりに有名な毛皮商 (Hayman Levy) の見習いとしてニューヨーク市に転居したが、この毛皮商は、インディアン交易用にラムを売却することによって、彼に自分の商業を始めさせた。一方二人の姉妹 (Sarah and Gertrude) は、アイルランドから移住し、コークやダブリンのもうかるリンネル・毛皮貿易を営んでいたウォールズ兄弟 (Hugh and Alexander Wallace) と、それぞれ、結婚した。ニコラスは、新しく創立されたロー・ウォールズ商会の仲間として、一七六〇年代、富裕で傑出した実業家となり、両家は、暖かい永続的な家族関係を結び、ニューヨーク市の社会的・商業的・政治的生活を分けあった。^⑩

ニコラスは、独立戦争前には公務上ほとんど何の役割も演ずることはなく (ただし、急進派に逆らうための諸組織の会長を勤めた) 独立を受け入れ、また、戦争中の大部分をフィラデルフィアで過ごし、英軍の撤退後ニューヨーク市に帰着した。戦後彼は、同市の最も高く評価された財産所有者の一人で、その金銭上の将来性は極めて有望であった。彼は、ロイヤリスト没収地約八、二五〇ドルを購入し、また、邦債に幾万ドルも投資、九〇年の第一回連邦借り替え操作で彼だけで三八、七二九ドルの借り替えがなされた。^⑪

彼は、実業上・金融上のコネを上げ、多くの有力者 (Philip Schuyler や Alexander Hamilton たち) と親交したが、金持ちたちの精神的な事業代理人となった。例えば、連邦上院議員であったキング (Rufus King) がイギリス公使であった間、定額手数料をもらって公使年賦金を代理受領し、その資金を投資し、また個人的奉仕をした。しかし、自身投機家であった彼は、九〇年代に、一かく千金をねらう陰謀

家や弁護士の策畧に驚がくした。例えば、キングのためにある問題を解決したのち彼は、「何とまあこのような弁護士よ。彼らの手中に陥ることから神よ私を守り給え」と激昂している。^{②③}

それはとにかく、ニューヨーク銀行の二人の最初の取締役の一人で有力な株主でもあった彼は、九一年に新合衆国銀行の取締役ともなった。ところが九二年、ライバルとなる恐れのある「両銀行の統合をもたらす何らの手段も講じなかった」として、彼が双方の取締役であることを非難した新聞論説が公刊されたため、彼の不快感は明らかに高まった。同年彼は、ニューヨーク銀行取締役を役を辞任した。^{②④}

なお彼は、生涯の長期間独身であったが、五五才（一七九四）とき末亡人（Alice Fleming）と結婚、三人の子をもうけた。また、当時の金持ちに共通のことであったが、奴隷を所有していた。^{②⑤}

市政界で彼は、明確なフェデラリストであった。八八年、邦下院議員（一期勤務）に選出され、また、合衆国憲法批准のための邦協議会への代表に当選、後者では激論には加わらなかったものの、批准に賛成投票した。さらに九二年の州知事選挙では、フェデラリストからの候補者ゼイ（John Jay）を支持、その敗北後のプロードウェイでの公憤示威第二集会を主宰した。^{②⑥}

中央政界での彼のワシントン、アダムズ政権協賛は、彼の商人である背景、投機への利害関係、新興財産保有層との提携の自然な帰結であった。彼は、ハミルトンとは友好関係をとどめたけれども、とくにアダムズを、「不屈の愛国心と真の誠実さ」を有する人間と称讃した。しかし一八〇〇年には、フェデラリスト党が「指導者の意見が一致せず、支持者に糾合点のない解体されかけた結社」という「不幸な状態」にあることを嘆き悲しんだ。彼は、合衆国憲法は長く持ちこたえられないと主張した曾って勢力のあったフェデラリストと意見を異にした。次いで一八〇〇年の大統領選挙で、野心家のバー（Aaron Burr）がジェファソン（Thomas Jefferson）と同数となったとき、陰謀家が前者を大統領にしようとする目論むことを恐れ、後者の大統領当選を喜んだ。^{②⑦}

話変わって商人としてニコラスは、全米の個人や商社との広い商業的接触を發展させ、また、世界各地の外国商人やその代理人と広く文通した。この通交は、英・欧との通商関係や出現しつつあるアジアとの交易のみならず、初期国民国家時代のアメリカの商業發展に関する情報を提供した。早くも一七九〇年、アメリカ人代理業者は、広東やマドラスでの状態と機会を告知した。こうして、彼が二六、〇〇〇ドルを投資したロー・ウォーレス商社は、インド貿易に従事、マデライワインを輸入した。しかし、同社は、イギリスやアイルランドでの代

理業務は極わめて積極的で、一八〇〇年までに四〇、〇〇〇ドルの利潤をあげた。とはいえ、彼は、「大金持ちになる気持はなく」、仲間割れを生むような禍根を回避、十八世紀末以前に、活動的な商人であることをやめ、ロー・ウォーレス商社の業務はA・ウォーレスの息子(William)によって運営されることとなった。しかし、彼の収入は、一七九九年に地所とともに三、五〇〇ポンドと評価されたブロードウェイの家屋をもたらずのに十分であった^④。

一七九〇年代ニコラスは、先ず個人で次いで仲間、海上保険業において活動、九六年創設のもうけの多い合同保険会社の理事の一人となった。会社は、九〇年代末に戦時損失をこうむったが、他の点では変動があるとしても良好な利益をあげた。ところが彼は、同会社の自有株の大部分を売却するなどしたためきられ、一八〇三年早々までに次の役員選挙では排除されるだろうといわれた。明らかに彼は、土地投機の将来性と諸課題に心を奪われたため、保険業への関心を失ったのであった^⑤。

自国産業の育成を希望する一人として彼は、九一年に組織された有益製造業設立協会への最初の応募者の一人となった。九二年理事となり、同協会の運営に深くかわり、現在のパートナーに位置する紡績・仕上げ工場用の熟練労働者を輸入するための予算を勧告した委員会に奉仕した。また彼とスカイラーたちは、パセック河の大滝周辺地を探索、正に滝の所での工場建設を決定した。さらに彼は、設備と移民労働者の調達のための五〇、〇〇〇ドルの使用を管理する委員に指名された。次いで、初代同協会長デュアー(William Duer——元財務長官補。ニコラスは、デュアー一派が投機失敗によって協会に損失をもたらしたことを指摘)の債務訴訟による投獄に伴ってニコラスは、協会長代理としての執行上の職務を担わされた(九二年一月、デュアーは正式に協会長を罷免された)。協会は、右の九二年恐慌状態後も残存したものの、会計係を勤めたニコラスは、経統する困難に悩まされた。そのうえ、パートナー工場の経営も悪化し、協会は、財政的困難を切り抜けることができず、九六年にその活動を中止せざるをえなかった。もっともニコラスは、一八〇二年にも理事会の会合への出席を求められたけれども^⑥。

それはともあれニコラスは、そのときまでに土地投機に手を出していた。九〇年代始め彼は、ニューヨーク州北部の辺境地を購入・開発した。例えば、九二年、クーパー(William Cooper)と共同でクーパータウン周辺の土地を売買し、かつ同年末、クーパーから土地五、〇〇〇エーカーを購入した。また彼は、九四ないし九五年、オルバニイ北方二五マイルのボルスタン・スパーの地所を売却し始め、そこで一

八二二年まで土地の売却や賃貸しをつづけ、かつ、一八一七年およびそれ以後に補足的地積を購入した^⑦。さらに九五年、他の三人の投機家とともに、のちにブラック河区域として知られた土地で一エーカー一ドルで三〇〇、〇〇〇エーカーを購入、九七年ニコラスは、元農民の法律家ストー（Sias Stow）を同区域開発地のための代理人に起用した。ストーの報告によれば、九八―九九年に一〇〇以上のそりが、動産や食糧を積んで到着、製材所は、活発にブンブンうなり、部落は隆盛した。従来以上の土地を求める人々が来て、今まで以上の地所が売れた。ストーは、九九年一〇月までに二、〇〇〇エーカー、一八〇〇年八月までにさらに二、五〇〇エーカーを売却、その後もより以上の売却を予期した。大底の newcomer は、ニューイングランド人であったが、他はニューヨーク市民、アイルランドないしドイツ移民であった。こうしてニコラスは、十九世紀初期、富裕な土地を所有するフェデラリストの一人となり、ブラック河をモホーク河まで伸ばす運河およびシャンペイン湖とセントローレンス河を結ぶ運河の開削計画を、自有地の価値を高めるために強く支持した。なお彼は、セネカ湖付近、ゼネシイ地方、スチューベン郡、ジェファーソン郡などにも土地を保有した^⑧。

一八〇一年彼は、北部開発地旅行に五週間を費やしたが、勤勉な移住民が「独立富裕農」になっているのを見て満足した。ブラック河近くの彼の土地の平均価格は、一エーカー三ドル以上であった。しかし、ゼネシイ地方などの自有地の将来性には、確信がもてなかった。彼は、翌一八〇二年にも北・西部を旅行し、私財を査察した。このときまでに彼は、北郡ニューヨークの土地に一六〇、〇〇〇ドル以上を使用し、二、五〇〇ドルを除く全借財を返済していた。しかも彼は、主としてニューヨークに関心をもっていたが、ケンタッキイのような西部にわたる他地域の投機にもかかわっていた。ところで彼は、とくにルイス郡のブラック河西方区域の開拓に配慮し、そこにローヴィル村を創設、彼の家族は一八〇八年設立の同地学園に無利子で融資し、また一〇年後には、同地のツリニテイ教会建設を援助した。一方彼は、ボルスタン（サラトガ郡）にある父から継承した広大な土地が、鉱泉ゆう出のために一八〇〇年代初期避暑地となったのに応じて大ホテルを建設した。また一八一〇年彼と友人は、同地の綿織工場に投資、同工場は、一八一二年の戦争中の綿織物不足に伴って数年間著しく繁栄した。さらに一四年彼は、考えられるイギリス軍の攻撃からニューヨーク市を防衛するため、「同地軽騎兵隊」に加わった。しかし、戦後右の工場は、復活した輸入織物の競争に立ち打ちできず、投資した資金のほとんどが失われた。また同地鉱泉も、サラトガ温泉の出現によって行楽地として名声を失った。ここにおいて彼は、同地の全財産を売却した^⑨。

ともあれ彼は、熱心な土地開発者で、土地投機には敢て危険を冒すつもりであった。土地投機に反対したキングに対して彼は、次のように叫んだ。「商業的事業に従事するエネルギーをなくすほど深く、土地投機に没入するのを喜ぶ道理があるのだ」と。

一八一八年に妻が死んだのち、ニコラスは商取り引きから手を引いて保有地を監視し、静かに閑居した。長男 (Cornelius) は父の土地代理人となり、父死亡まで弁護士としてローヴィル村にとどまった。ニコラスは、ツリニティ教会に参詣し、後年長く教区委員を勤めた。

彼は、娘 (Henrietta) の結婚後一ヶ月もたたない一八二六年二月一五日に死亡した (八七才)。

おわりに

以上がロー兄弟の畧伝である。省みれば、兄アイザックの商業会議所の指導、初期の本国政策への抵抗、五一人・六〇人・一〇〇人委員会委員長としての持続した傑出は、商業界のみならず一般大衆の協賛を証拠立てた。彼は、トーリイが描写したような荒れ狂う扇動家でもなければ、ホイッグ活動家が主張したような体制側の道具でもなかった。彼の指導者たる地位が、富裕エリート of 市政支配の象徴であったとしても、ニューヨーク人が過激な方策を求め、公生活がはなだしく両極化するに至った一七七〇年代に彼は、懐柔的役割を引き受けたのであった。しかし、自分が制御できない事態に左右され、独立容認を欲せず、家族上・商業上の結びつきに影響されて彼は、どたん場本国に味方した。彼の最後のトーリイ主義と亡命生活は、結局無力であったとしても、その真剣で誠実な指導者としての資質を覆い隠すものではなかった。しかも、たとえ損失補償がなくても、彼が声明したように、イギリス臣民として一生を送ることは、彼の夢の窮みであった。

これに対して弟ニコラスは、独立戦争前・中にほとんど公事にタッチせず、独立を認めて英軍撤退後ニューヨークに帰着した。商人として活躍中彼は、広い国際的交際を維持したが、それは、米欧間の商業的結びつきならびに米亜交易の将来性を示すものであった。また彼は、アメリカの個人や商社と広範な取り引きを行ない、かつ、幾人かの著名人 (通常、フェデラリスト) の財政上の代理人として行動した。さらに彼は、公債に投資し、金持ち層と提携したため、ニューヨーク銀行や合衆国銀行の取締役として初期銀行業に加わった。従って、十八

世紀末の彼の政治的姿勢は、フェデラリスト支持であった。後年彼は、土地投機に没頭したが、それは、アメリカの将来についての彼の楽観と、北・西部ニューヨーク州の開拓地における彼の企業家的役割を示すものであった。こうして、独立を認めたこそ彼は、アメリカの発展史にあずかることができたのである。

ところで先に筆者は、特定の個人にレッテルをはることは慎重でなければならないと指摘した。確かにロー兄弟は、モブ・ルールに反対する点では兩人とも体制保守派であり、また、最初から一人とも独立運動を目的としなかった。しかし、どたん場で兄は独立を拒否し、弟は受け入れた。この選択は、兄弟の生涯を異なるものにした。両親をともにし、ともに実業界のエリートでありながら、決定的瞬間での判断が、如何に人生行路を左右するかの典例ということができよう。そしてこのように対照的な終末を迎えた人間像の考究は、いわゆる社会経済的分析ではいつくせない点をえぐり出し、歴史研究のあり方について示唆するものがあるのではなかろうか^⑩。

註

- ① 茨木慶三 「十七世紀後半におけるニューヨーク政治動乱について」(『西洋史学』五九号 一九六三), 175, 194.
- ② Robert Ernst, "Isaac Low and the American Revolution"—Hereafter cited as ILAM—, *New York History*, LXXIV / 2 (1993), 133-57; do, "Nicholas Low: Merchant and Speculator in Post-Revolutionary New York"—Hereafter cited as NLPRNY—, *New York History*, LXXV / 4 (1994), 357-72.
- ③ Virginia Harrington, *New York Merchant on the Eve of the Revolution* (1935), 212-2.
- ④ John Austin Stevens, *Colonial Records of the New York Chamber of Commerce, 1768-84* (1867), 70-3.
- ⑤ Harrington, *op. cit.*, 348; Carl L. Becker. *History of Political Parties in the Province of New York, 1760-76* (1909), 75.
- ⑥ Stevens, *op. cit.*, 203, 228, 254, 284, 299.
- ⑦ *New-York Journal; or the General Advertiser*, May 17, 24, Aug. 2, 1770.
- ⑧ Dorothy R. Dillion, *New York Triumvirate: A Study of the Legal and Political Careers of William Livingston, John M. Scott and William Smith Jr.* (1949), 110.
- ⑨ 茨木慶三 「独立宣言以前のニューヨーク市メカニク」(『三重大学教育学部研究紀要』三一巻二号 一九八〇), 69.
- ⑩ Bernard Mason, *Road to Independence: the Revolutionary Movement in New York, 1773-77* (1966), 12-4.
- ⑪ Becker, *op. cit.*, 107-8.

- ⑫ American Loyalist Claims Transcripts, 43:200.
- ⑬ New York Gazette and the Weekly Mercury, May 23, 1774; Becker, op. cit., 133-7; Mason, op. cit., 26, 28n, 70.
- ⑭ New York Journal; or the General Advertiser, May 26, June 23, 1774; Roger J. Champagne, Alexander McDougall and the American Revolution in New York (1975), 56.
- ⑮ New York Gazette and the Weekly Mercury, June 27, Aug. 1, 1774; New York Journal; or the General Advertiser, Aug. 4, 1774.
- ⑯ American Loyalist Claims Transcripts, 43:199.
- ⑰ New York Journal; or the General Advertiser, Nov. 24, 1774.
- ⑱ Champagne, op. cit., 80-1; New York Gazette and the Weekly Mercury, April 24, 1775.
- ⑲ Thomas Jones, History of New York during the Revolutionary War ed. by Edward F. DeLancey (1879), 1:43.
- ㉑ Mason, op. cit., 206.
- ㉒ Becker, op. cit., 232; American Loyalist Claims Transcripts, 43:161.
- ㉓ Ibid., 43:149, 153, 162-3, 170-1, 173, 195-6; Harry B. Yoshpe, The Disposition of Loyalist Estates in the Southern District of the State of New York (1939), 199.
- ㉔ ILAM, 151.
- ㉕ Ibid., 151-5.
- ㉖ Ibid., 155-6.
- ㉗ Yoshpe, op. cit., 40-1.
- ㉘ New York Mercury, May 12, 1760; Stevens, op. cit., 20, 69.
- ㉙ Forrest McDonald, We the People: the Economic Origins of the Constitution (1958), 302; Alfred F. Young, Democratic Republicans of New York: 1763-97 (1967), 79-80.
- ㉚ NLPRNY, 359-60.
- ㉛ New York Journal, Feb. 15, 1792; Daily Advertiser, Feb. 17, 1792.
- ㉜ NLPRNY, 361.
- ㉝ New York Daily Advertiser, July 14, 1792.
- ㉞ NLPRNY, 361-2.
- ㉟ Ibid., 362-3.
- ㊱ Ibid., 363-4.
- ㊲ Ibid., 364-6.

- ⑳ Cf. Alexander C. Flick ed., History of the State of New York (1933-87), 5:121.
- ㉑ Ibid., 7:37.
- ㉒ NLPRNY, 369, 371; Dixon R. Fox, Decline of Aristocracy in the Politics of New York (1919), 137, 189.
- ㉓ Ibid., 370.
- ㉔ 茨木慶三 「『独立への道』——ニューヨークにおける革命運動（一七七三―一七七年）」（『三重大学教育学部研究紀要』三〇巻二部 一九七九），54；
do, 「シエレミア・ウィングアップの選択——愛国保守派の人間像——」（三重初等教育研究会『初等教育研究』一九号 一九八五），8, 11-2 [了]